

大震災から3年を迎えようとしていますが、課題は山積みです。被災地では、復興工事関係者でまちはにぎわっています。ところが、地元の人々は働く場所を求めて流出しているとい... 復興とは、建物や道路の建設の問題ではなく、人々のなりわい、地域の継続的な産業の活性化であり、一過性のにぎわいは都市の復興を示さないということの事例です。産業が衰退すれば人口は減少し、高齢化・過疎化が進みます。地方の活性化のために何が必要なのかをよく考える必要があるのではないのでしょうか。

考えよう! 鳥取市のまちづくり。

満開の桜も映える鳥取市のシンボル久松山

太田ゆかりの思い—鳥取市議会での一般質問など①

平成25年2月鳥取市議会定例会

平成25年3月4日

質問の要約

今日の鳥取市の縦割り行政では「まちづくり」と「産業振興」が別々の部局で検討されているため、「まちづくり」と「産業振興」それぞれが効果的に進まないのではないか。

地域資源を活かした地場産業の振興とまちづくりについて

所管部:都市整備部・経済観光部・農林水産部

- ①地域資源を活かした地場産業の振興について
- ②地域資源を活かしたまちづくり
- ③公共施設整備について

太田ゆかりの発言

明治維新後、産業基盤の確立に困難を来し、山陰道は商工業地にあらずして前々農業地であると、地元選出議員は農業高等学校の誘致を政府に願い出ます。そして大正10年、日本で3番目の鳥取農業高等学校が吉方村に開学します。これが鳥取大学の前進となりました。昭和27年には鳥取高等農林学校に改称され、近代林業による立県も目指しました。

このように、鳥取と林業の歴史は大変古いことがわかります。地域の特色と何も関連のない企業誘致だけでは、まちはいずれ産業を失ってしまいます。徳島県では林業の復興を目指して、日本初の、『徳島県産材利用促進条例』を制定されました。同県美馬市では顔の見える木の販売、秋田県では県営施設の木造化・木質化85%以上を目指しています。隣の鳥根県奥出雲町では小学校校舎・体育館の木造化など、全国でさまざまな取り組みをしています。

※木材の利用の促進に関する法律があります(2面参照)

太田ゆかりはこう思う。

地域の産業は古くからの土地の歴史に学び、風土、気候、そして地の利を生かしたものでなければ地域には根つきません。地域資源なき産業は長続きしないと考えます。

日本の伝統技術で建てられている社寺の建築にすら輸入木材が使われている現実があります。鳥取には古い建造物がたくさんあります。街並みとして整備したり、少し手を入れることにより、新たな鳥取の資源

としても魅力をつくり出すこともできますし、地元産材が活用され、地元の産業の活性化に役立つのではないかと思います。

平成25年6月鳥取市議会定例会

平成25年6月10日

質問の要約

岐阜県郡上八幡市では、古くからの町並みが残る道路の拡幅計画に危機感を感じた住民の声を尊重したまちづくりによって、地域が活性化している。

鳥取市まちづくりにおける城下町の遺構・歴史遺産の活用

所管部:都市整備部・経済観光部・教育委員会 市庁舎整備局

- ①鳥取城址整備と城下町の遺構・歴史遺産との関係
- ②鳥取市まちづくりにおける城下町の遺構・歴史遺産への配慮
- ③鳥取市庁舎整備と鳥取市の歴史を尊重したまちづくり

太田ゆかりの発言

県立鳥取西高校の耐震補強の方針が出され、今までどおり史跡と学校が共存していくこととなりました。

城跡整備計画について、短期間に即結論を出すのではなく、やはり調査・研究を怠ることなく、鳥取県、それから関連諸団体、地元との協議をすべきです。1回壊してしまっはもとに戻りません。

三階櫓、天守閣等の建設を要望する市民の声は現在も強いものがあります。なぜ大手登城の整備や橋の付け換えが先なのか市民には伝わっておらず、大手登城路については再検討の必要があると思います。

鳥取の400年あまりの城下町構築は長い歴史があります。鳥取城下町の地盤整備は土木遺産ともいえるほど素晴らしいものです。鳥取のまちは水害・災害に対して何度も何度も立ち上がってきたまちです。その先人の工夫と技術をぜひ学んでいただき、活かしていただきたいと思います。

太田ゆかりはこう思う。

城跡整備のみを進めれば、まちが歪んでしまう危険性もあります。城跡整備もまちづくりの一環ではないでしょうか。史跡周辺の広い範囲を歴史まちづくり地区として、市民・地域住民の方々や関連諸団体と一緒に保存・活用の検討を行った方がよいのではないのでしょうか？

平成25年8月鳥取市議会定例会

平成25年9月5日

質問の要約

城は元来、防災拠点であり、城下町は防災都市である。堅牢と言われた鳥取城も秀吉によって周辺地域との繋がりを絶たれ滅んだ。周辺地域とのつながりなしには都市は成り立たないのではないか？ 市庁舎の本来の役割を精査した議論が必要ではないだろうか？

市庁舎整備について

所管部:市庁舎整備局・総務部・都市整備部

- ①基本方針案について
- ②災害対策について
- ③鳥取大震災と液状化被害について
- ④地盤調査及び耐震対策について

太田ゆかりの発言

鳥取は災害と闘いながらまちを形成してきました。暴れ川の千代川の氾濫、繰り返された水害、地震に火災と、先人は多くの災害から復興をなし遂げてきました。

災害対策でいちばん対策をとりにくい問題に、地盤の液状化があります。これは3・11以降、より深刻な問題になりました。河川付近で液状化が起こることは当然ながら、近年の研究では旧河川跡なども発生しやすい地質であることがわかってきました。多くの都市においては、液状化対策として従来のハザードマップに液状化マップを重ね合わせて対策を検討し始めています。

他都市では随分『液状化マップ』を作成しています。鳥取と同じころに大地震があった福井県福井市にもあります。災害対策にはあらゆる情報が必要です。情報が出てこない危険予測はできません。今の鳥取市は液状化を考えない防災対策を行っていると思えます。3・11後、平成24年に国交省は河川の堤防化設計指針の検討を始めました。国交省ですら液状化の対策をまだ確立はできていません。(2面へ)



千代川の脇に市庁舎で“安全”なのか



鳥取市議会議員太田ゆかり事務所
〒680-0022
鳥取市西町1-106 和光ビル内
TEL 0857-26-1152
FAX 0857-22-4103
Eメール info@engawa-yukari.com

ご意見、ご要望をお聞かせください。

太田ゆかり公式ホームページ
http://engawa-yukari.com
鳥取市のあり方や、具体的な政策を提言し、社会に問いかけていきます。また「議会報告」日々思うことを発信中。ぜひ一読ください。

SNS やっています。

engawa_yukari
engawa_yukari

歴史的な災害と 災害対策の重要性



池田家は、明治22年、鳥取城址の一部を現在の鳥取西高校用地として鳥取県に提供しました。仁風閣が建設されたのは明治40年。博物館が建設されたのは昭和46年。これらは全て歴史的な経緯であって、史跡を教育・文化のために活用することは決して非難されることではないと思います。

県立鳥取西高校の耐震補強の方針が出され、今まで通り史跡と学校が共存して行くことになりました。

鳥取市は、史跡の保存・活用計画について文化庁のみと相談するのではなく、それを活用する市民の合意を得ながら城跡整備を計画しなければなりません。鳥取城は山の急斜面を切り、盛土し、石垣で押えて平地を造って築かれました。城跡の維持には堀が重要であり、排水計画なしには切土、盛土も石垣も維持できません。山城も生活用水なしには使えません。排水と生活用水を合わせた水道(みずみち)の計画が大切です。現在の鳥取城跡整備計画には、排水計画が十分に示されていません。藩政時代の水道システムを調査し、維持・保存・活用することが重要です。

近年、文化庁においても、文化財や歴史遺産の保存をそれらの活用を前提に推進しようとしています。歴史遺産の活用といえば、城下町鳥取の土木技術を保存・維持・継承することも重要です。鳥取のまちづくりを考えるとき、何度も繰り返された水害の歴史、地震と火事、被災経験から学ぶべきことは多々あります。最近、石垣がはらんで危険な状態の部分が増えています。石垣が崩れていくのを防がないで城跡整備を進めるのは順序がどこか間違っていないでしょうか？

そして久松山全体の治水を考えていない中では、城跡の維持も十分には出ていない。そのような中で、鳥取の防災を語るのも順序が違うように思えます。まずは、地歴に学び先人の知恵と工夫を学ぶべきかと思う。桜美しい鳥取のランドマーク久松山は、自然の力の怖さをも、市民に伝えてくれています。無駄にしてはならない。

太田ゆかりの思い—鳥取市議会での一般質問など②

用語解説

木材の利用の促進に関する法律

平成22年5月26日「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が、公布されました。戦後、造林された人工林が資源として利用可能な時期を迎えるにも拘らず、木材価格の下落等の影響などにより伐採が進まず、森林の手入れが行き届かず、森林の国土保全機能すら低下する事態となっています。

このような厳しい状況を克服するためには、木を使うことにより、森を育て、林業の再生を図ることが急務となっています。本法律は、こうした状況を踏まえ、現在、木造率が低い公共建築物にターゲットを絞って、国が率先して木材利用に取り組むとともに、地方公共団体や民間事業者にも国の方針に即して主体的な取組を促し、住宅など一般建築物への波及効果を含め、木材全体の需要を拡大し、林業を再生することをねらいとしています。

地盤の液状化による堤防などの側方流動

古い河川の下には厚い砂の層があり、地下水位は川の水位とほぼ同じです。砂層は水を沢山含んでいるため、地震で揺さぶられると簡単に液体のように揺れ動く液状化現象を示します。また川の内側は水ですが、川の外は土なので重い土の圧力で堤防は川の内側に押し出されてしまいます。昭和18年の鳥取地震で千代川の堤防と橋梁が大きく破損したが、3・11で関東以北の多くの河川堤防が同様に壊れた。地震で地盤が液状化したためだが、その対策は今も無いままです。



水路暗渠化の問題

水路は、暗渠にして道幅を広げた方が良く考えられる場合が多くなっていますが、暗渠は、円形の断面とすることが多く、V字型やU字型の水路の場合に比して水路幅の割に容積が極端に小さく、集中ゲリラ豪雨のような場合の急激な水量増加に対応できない場合が多い。

(1面から続く)3・11では堤防が壊れ、阪神・淡路大震災では高速道路や新幹線の橋桁も落ちました。これは基準に沿って安全に設計されていましたがそれは壊れました。絶対安全は今や神話です。

水量の多い千代川のすぐ脇に新たな市庁舎＝防災拠点を持つてくる千代川のすぐ脇の市立病院跡地に防災拠点や対策本部を持つてくるということは(防災上からは)全く考えられません。考えられたとしても、どれだけの費用がかかるのでしょうか。

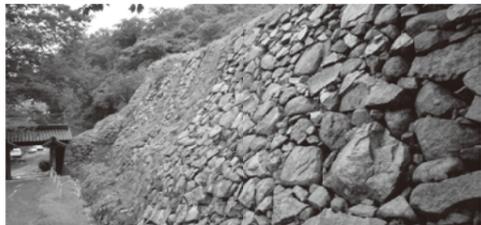
液状化を対策して建物を建てる。建物を建てる以上に地盤の改良にお金はかかるといいます。防災拠点と言うなら、土地の広さよりも、信用できる土地を選ぶべきです。

太田ゆかりはこう思う。

昭和18年の鳥取地震の甚大な被害は、埋立地盤の安定化が難しいことを示していますが、それでも旧城下町は江戸時代、地盤対策の大工事が施されています。古くからの川の堤防は、どれも厚い砂層の上で、一本杭を打てば済むという簡単なものではないのでしょうか？

鳥取県立西高等学校の耐震改修と城跡整備の関係について、また関連事項である久松山水系・鳥取城水道谷整備計画について質問しました。

(この議場でも)久松山の治水対策を何度か述べてきました。グラウンドの排水計画をはじめとし、建物を建築する前にやはり排水計画、治水対策を十分過ぎるほどに行う必要があると思います。県との協議をはじめ、市の各部署、学校管理者、地域住民も交えて丁寧な検討が急務です。県と市がばらばらに協議するのでなく、一緒に同時に協議していただけたらと思います。



鳥取城跡の石垣が、はらんでいるのだが

太田ゆかりはこう思う。

城跡内に藩政時代から存在する3本の水路(大手橋、鳥取濠、長田神社参道横)。その現在の管理は県・市、さらに市でも複数の担当課に分かれ相互の連携体制がありません。砂防治水の観点からの検討も必要、城跡整備は幅広い部局の協力体制で行うべきです！

平成25年12月鳥取市議会定例会 平成25年12月11日

質問の要約

鳥取市は「防災拠点」をつくれれば「防災に強いまちづくり」ができると考えているが、3・11で多くの人が防災センターで犠牲になったことを思い出せば、あまりに無理が多いといえないだろうか？

防災に強いまちづくりについて

所管部:危機管理課・都市整備部・協働推進課 教育委員会

- ①被災経験を生かした防災計画について
- ②想定災害とハザードマップについて
- ③河川・堤防と地盤の液状化危険について
- ④急傾斜地崩壊危険区域について
- ⑤避難場所の指定について

太田ゆかりの発言

鳥取市は久松山麓に城下町を築き始めて既に400年になります。大震災と大火災という2度の災害、幾度もの千代川の氾濫を乗り越えながらまちを築いてきました。

鳥取城大手登城路整備計画によって現在の大手橋は車両通行できなくなるため、武道館と解体した弓道場との間から代わりの道が設置されようとしています。それが今の鳥取濠を埋めることとなります。

鳥取濠は久松山の治山治水の要であり、集水範囲は太閤ヶ平に始まり、水道谷、通称長田の谷の全ての水を受けています。鳥取濠を暗渠にするこのような安易な計画に住民の合意は得られているのでしょうか。史跡と共存する鳥取西高の具体的なイメージを考える中で、学校としての機能、生徒の安全は確保できているのでしょうか。

太田ゆかりはこう思う。

防災に強いまちづくりは、全国各地で真剣に考えられるようになってきていますが、地域ごとに想定される災害が違い、検討の方向も多様です。ただ「絶対に安全なまちにするのは、難しい」というのが共通の考えだと思います。危険を拡散することで、被害を軽減することを基本にして取り組まれています。鳥取市が取り組もうとしている“ひとつの防災拠点を築けば良い”という考え方を見直す必要があるのではないのでしょうか。



大雨後の鳥取西高は“大変なこと”に

鳥取濠の集水域は栗谷川とほぼ同じで、最近の豪雨は平常の5倍と言われています。この水をきちんと処理しなければ、お城全体が崩れてしまいかねません。しかしながら史跡整備の基本計画・実施計画の中には排水計画の記載がありません。

(中略)城内の水路が壊されていると。雨水の排水ができず、表土に含まれている水分が大きくなり、水圧がたまって石垣を押し出してしまう。水路の整備が必要だというふうに思います。

太田ゆかりはこう思う。

鳥取のランドマーク久松山は宮部以前から城の整備が行われたのですが、城には水が必要であり、この久松山の雨水は貴重な水源で、それを集めて城下に配水するみずみちの仕組みが次第に整備されました。

私たちが知らなければならぬことのひとつに、標高263メートルの久松山の山は岩山で、雨水を吸いこむ力がなく、ひとつ間違えれば大災害を引き起こす鉄砲水になる要素を持っているということがあります。先人は災害と闘いながら、鳥取の気候風土を生活に活かし、自然と共存してきました。そのように先人の知恵と工夫に学ぶべきです。

平成26年2月鳥取市議会定例会

平成26年3月6日

質問の要約

ハード整備やイベント事業に偏ったにぎわいとは何でしょうか？地場産業を通して創出されるにぎわいこそが、真の活性化を促すのではないだろうか？

鳥取市の活性化とにぎわいについて

所管部:都市整備部・総務部・経済観光部 市庁舎整備部

- ①鳥取市の人口・企業数・就業者数の推移とその地域分布について
- ②中心市街地活性化及び地元企業の育成と企業誘致について
- ③地域の資産・歴史遺産の活用と産業の活性化について
- ④鳥取市庁舎整備について
- ⑤歴史まちづくりについて

太田ゆかりの発言

産業が衰退すれば人口は減少し、高齢化・過疎化が進みます。地方の活性化のために何が必要なのかをよく考える必要があるのではないのでしょうか。

例えば日本一寒い北海道陸別町では、晴天率が高く、寒冷な自然条件を産業資本として活用しています。国際的な天体観測施設、また南極にも匹敵する低温をつくれる研究施設をつくって、自動車の航空機の寒冷地実験を行い、寒さに負けず頑張つて、まちはとても元気です。また、秋田県小坂町では、鉱山技術を活かして携帯電話などから各種レアメタルを抽出する新たな産業を生み、鉱山鉄道を基盤とし、鉄道遺産を活かした地域活性化を行っています。

地域の活性化はハードハットのような建設のハード整備、看護学校や企業の誘致だけに頼るのではなく、地場産業の充実・地元企業の支援や育成がなければ、真の活性化とにぎわいは生まれません。

ひとつ踏み込んだ提案をしたいと思います。例えば用瀬地区では都市再生整備計画というのが進められています。この計画では、歩いて暮らせるまちづくりやUIJターンの住宅支援の事業などが取り組まれています。

先進的にまちづくりに取り組んできた倉敷美観地区では近年、美観地区を拡大し、まちなみをさらに整備しています。倉敷デニムや倉敷帆布、地元の特産を活かした企業、産物を活用したレストランやカフェも誕生し、そこに自治体の協力・支援もあり、結果として都会からUターンしてきた若者たちがにぎわいをつくろうと頑張る好循環を生み出しています。

UIJターンだけでなく、さらに新しい産業や雇用を生み出すために、中心市街地で行っている起業家支援等、にぎわいの創出のための施策を新市域でも行っていくべきだと考えます。

太田ゆかりはこう思う。

中心市街地の活性化はよく議論されていますが、新市域の活性化について、より一層の議論が必要ではないかと考えます。新市域の産業は基本的に第一次産業だと思いますが、それは産物の使われ方とつながった時こそ、活性化し、本当の賑わいが生まれるのではないのでしょうか？